

若者文化は25年間でどう変わったか

——「遠隔＝社会，対人性，個人性」三領域の視点からの「計量的モノグラフ」——

辻 大 倉 泉
野 村 勇 人

目 次

1. はじめに
2. 若者文化の論じ方について
3. 分析対象と方法
4. 分析結果(1) 遠隔＝社会領域の変容
5. 分析結果(2) 対人性領域の変容
6. 分析結果(3) 個人性領域の変容
7. 分析結果(4) メディア文化受容の実態
8. ま と め

1. はじめに

本論文の目的は、およそ過去25年間にわたる若者文化の変容について、社会学的に領域横断的な、経年比較研究を行うことにある。

以降でも繰り返し述べられることになるが、1990年初頭の若者たちは、当時の状況を踏まえながら「バブル世代」と呼ばれ、他にも「新人類」「オタク」といった呼称でとらえられていた。一方で、今日の若者たちは、「さとり世代」(原田2013)、「ジェネレーションY」(日本経済新聞社編2005)、「デジタルネイティブ」(NHK「デジタルネイティブ」取材班2009、濱野2012、松下2012など)などと呼ばれ、過去と比べ全般的に「大人しい」といわれるその特徴をとらえて、「若者の〇〇離れ」(電通若者研究部編2016)といった言い方もよくなされている。こうした呼称に代表されるような、過去と現在の若者文化の変容を記

述することが本論文の目的である。

すでに筆者らは、同様の問題意識に基づいて、1990年から2009年までのおよそ過去20年間にわたるその変容について、分析を行ったことがある(辻・大倉・野村2016、以下、「前回論文」と記す)。

前回論文では、1990年代以降、社会のありようととともに大きく変容を遂げてきた日本の若者文化について、近視眼的に、また否定／肯定的な極論に偏らないように、幅広い視点から論じること留意して経年比較研究を行った。その結果、社会全体の見通しが不透明になるとともに、対人関係もリスク化し、自信を持ちにくいような状況になりつつあること、さらに、こうした変容がおおむね地域を問わずに進んできているものの、一方では、先行きの不透明感や自信のなさについて、地方都市において先んじている可能性のあることなどが明らかになった(辻・大倉・野村2016)。

先取りするならば、本論文は、前回論文の内容と比べ、その方向性において、おおむね変わるところはないが、その問題意識を継続しつつ、さらにいくつかの質問項目に変更を加えた上で、経年比較研究の射程を延長したものといえることができる。そして結論において、「若者文化は25年間でどう変わったか」というメインタイトルの疑問文に対して、より明確に回答することを目指す。

よって、前回論文と同様に、本論文の特徴は、

以下の2点にあるといえる。

第一には、社会的に領域横断的ということである。特定のトピックに限定するのではなく、社会構造に関する複数の視点、とりわけ(1)遠隔＝社会領域、(2)対人性領域、(3)個人性領域の三領域に関する視点(宮台1987)¹⁾を中心に掘り下げていき、これにメディア文化受容の実態に関する分析を加えていく。

第二に、特定の一時点だけを取り上げるのではなく、25年間にわたる変容を浮かびあがらせるべく、1990・2005・2009・2015年の過去4時点の調査結果を取り上げた経年比較研究を行う。

前回論文でも指摘したように、とりわけ、今日の日本社会や若者文化にとって、こうした1990年代以降の時代変化が持つ意味は大きい。具体的には、1990年とは、いわゆるバブル経済の崩壊直後であるとともに、「就職氷河期」の訪れる少し前で、インターネットや携帯電話の本格的な普及以前でもあった。いわば今日と比べれば、グローバル化に代表される社会の流動化が、まだ相対的には激しさを増す前であり、日本社会や若者自身の未来像についても、肯定的で安定的な展望を抱くことができ、それゆえに、若者たちが華やかな消費文化をもっとも謳歌していた時期でもあった。

そして2000年代以降に至ると、知られるように、激しいグローバル化の進展の中で、社会の流動化が大きく進んできた。上記した前回論文の結論も、そうした状況下で導かれたものだが、本論文もまた、同様の問題意識を持ちながら、さらに経年比較の射程を延長させた「計量的モノグラフ」(尾嶋2001)と位置づけられる。

なお本論文の構成は、以下の通りである。次の2節では、ごくかいつまんで関連する先行研究をレビューし、前回論文から続く本論文の目的、特徴をあらためて明らかにする。その上で、本論文で用いる調査データを紹介した後に(3節)、(1)遠隔＝社会領域(4節)、(2)対人性領域(5節)、(3)個人性領域(6節)の三領域に関する質問項

目の検討結果を中心にしながら、これにメディア文化受容の実態についても記述を加え(7節)、最後に結果を全体的にまとめていくこととする(8節)。

なお、本論文は共著論文であるため、節・項ごとに、末尾にその著者名を記すこととする。

(辻 泉)

2. 若者文化の論じ方について

さて、日本社会における若者論の特徴としては、個々の議論が互いに関連付けられることもないまま、否定的、時には肯定的な論調に偏って、単発的なトピックの中だけで完結しやすかったという問題点を指摘できる²⁾。とりわけ1990年代以降におけるそうした特徴を、社会学者の浅野智彦は、「若者バッシング」と呼び表した(浅野2006)。

こうした極論に与せず、なおかつ単発的なトピックに閉じこもらずに、若者文化の実態や変容を記述し、当該の時代の社会状況への理解を深めていく上では、前回論文と同様に、1990年代に社会学者の宮台真司を中心とするグループが行った研究を参照することが重要であろう(宮台ほか1992、宮台・石原・大塚1993、宮台1994、岩間1995など)。その特徴は、若者文化の実態をコミュニケーションの総体として、できる限り引いた目から「客観的」ととらえ、なおかつ「立体的に」奥行きのある分析をしようとした点にあるといえる。

たとえば、1990年当時の若者については、世代論的にいくつかの呼称が存在していた。だが宮台らの研究においては、特定のひとつの呼称にだけ注目するのではなく、「新人類」と「オタク」と呼ばれる対照的なタイプの若者に同時に注目した。その際、最先端のファッションや流行などに敏感であった前者を賞賛するのでもなく、また対人関係が不得手な後者を一方的に批判するのでもなく、社会状況を踏まえつつ、両者の対応関係をとらえ、若者文化の実態を総合的に描き出して